

天理教の教義と教会の現状

八 島 英 雄

(天理教本吾孺分教会)

天理教の教義と実状について申し上げます。

天理教の教義といつても、天理教会本部から明治に発表された教典も、昭和二十四年に発表された教典も、本来の中山みきの教えとは遠く隔っていたということを、最初に申し上げておきます。そこで、比較をするためにも、中山みきの教えた天理教の位置・教えのあり方について、まず触れてみます。

一

明治教典では、天皇家の先祖である高天原の神々が、中山みきに神がかって、皇祖神の八紘一字の意志を説いたことになっていた。また、敗戦後に発表した教義でも、因果応報や輪廻の思想が主になってはいたが、やはり天の神が中山みきに神がかって、突如として神の想いを語りはじめ、それまでの中山みきの素質とは関係がないんだというような話になっている。ちょうど天上の神がマイクでしゃべったことを、みきがレシーバーで受けて、そのままスピーカで流すという形の教典が作られていた。

ところが、天理教団の中の良心的なみきの高弟たちが伝えた話では、ずっと違っている。これは、教部省で社会教

育・文部省で学校教育によって押しつけられ、どうしても高天原の神が、神がかったと言わなければ布教できないという実状があったことによつていました。

二

高弟たちの伝えるところの信仰の位置について概略を述べてみます。

信仰については、素朴に神仏にすぎると説かれている。天理教は、神道の十三番目の公認宗派ではないかと言われている、神仏という、何か迎合している様に感じるかもしれないが、実は古い大和の神職守屋筑前守様が、中山みきさんは仏法でいこうとしたのを神道にひっくり返したと、今までも言い伝えられている。それくらい中山みきは、仏教の知識しかない経歴だった。ですから、「神仏」というのはけつして迎合して言っているわけではありません。その信仰については、神仏にすぎる信仰と、神仏になる信仰と二つに分けて、おふでさきに、「たすけでもをかみきとふでいくてなうかがいたてゝいくでなければ」と書かれていて、この神仏にすぎる信仰ではいかんと厳しく教えられています。

つまり中山みきは、おすがりして仏様のおっしゃる通りになります、神様のおっしゃる通りに通りますという帰命頂礼の立場ではなくて、神仏になるといふ帰投身命を説いたわけです。

中山みきは、今まで南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏、助けて下さいと村中が何百年、代々願ひ続けて来たけれども、少しも社会は良くもならないし解決もしない。このいきづまりを脱するには、やはり仏にならなくてはいけないと考えた。

また、みきは、浄土宗の信仰、特に十王信仰を深く身につけ、十九才の時には、五重相伝を受けましたが、どうやらその頃から浄土宗では救いはないというように感じていたらしい。

家の信仰は、当時寺請制度で、浄土宗から離れられなかったのですが、個人としては、真言宗の人たち、特に西の日光ともいわれ九百七十一石の寺領を有する内山永久寺に属し、修験道の十二先達の一人に数えられていた理性院聖誉明賢の話聞いていた。

そこでは、いろんな曼荼羅を掲げ、祈禱が行なわれていましたが、最も靈驗あらたかとされていたのが一字金輪像といわれるものでした。この像が、実は転輪王であつたわけです。その転輪王が、すべての財宝・権力を使って難渋の人を助けてみんなで喜ぶ世界に変えていったという話を教えられたけれども、そこから一步踏み出して、自分は転輪王になり、これから難渋を助けて通りますと決心した。

今までは、願つてばかりいて、また家の中ではよく夫に仕え言う通りしてきたが、私も病気になる子供も病気になる。このままでは家は崩壊してしまう。それを解決するためには救いを願うだけではなしに、まず、自分が転輪王の心になつて難渋を助ける。たらない所に私の持ち味を足して、陽気ぐらしを作り、平等の世界に変える働きをします。覚悟してくださいと。夫に申し出たのが、天理教の立教宣言ということになつている。

そういう所からこの神仏になるといっても、具体的には身はそのまま、即身成転輪王という態度をとつたわけなんです。

この帰投身命の特徴、自分がそのまま成仏するということは、仏を理解してその心になつて自分の意思で生きるということになる。これに対して帰命頂礼は他の意思で生きる。この二つの基本線がある。これは、信仰者の心がまえとして非常に厳しく、大切なかどめとして、教えられている。

三

中山みきが教えをおふでさきにまとめて、大量に教義を書いた頃、日本は天皇神道を中心に据えて、明治三年に大

教宣布の詔勅、明治五年に教部省・文部省の設置、大教院制度が定められ特に尊皇倒幕の流れから、大和の大きな寺院などは、こなごなに壊わされて、廃仏毀釈が猖獗をきわめていた。

慶応三年に、みきが転輪王の心になって生きると言った頃、長男であり中山家の戸主であった秀司が、吉田神祇官領に願ひ出て、天皇家の先祖、天照大皇神の両親のイザナギ・イザナミ、その両親・両親・両親というようにさかのぼって、天神七代・十二柱の皇祖神を天輪王明神として祀る許可を得た。本来みきの教えは、転輪王なのですが、長男の秀司は、これを「天」に変えて、天輪王にして、これが母の説く神であるとして、信者に拝ませた。その時、秀司がみきの家の中の勤め場所として、信者が作った建て物の中に、この天皇家の先祖を祭り、そこで教えたのが天皇神道であつた。

こういうことが重なつた時期に、みきは「高山のせきよきいてしんしつの神のはなしをきいてしやんせ」と、高山の説教を聞いて、真実の神の話しを聞いて思案せよと言つた。みきの神というのは、仏教の守護神として教えられている転輪王であつた。それが秀司になつて、天皇家の先祖の神と神々という神道そのものにかわり、ここで説いたのが国の惟神の道の教育、八紘一宇の教育であつた。

そこでは、支配神が天降るといふ教えが基本になつていました。高天原の天照大皇神の命によつて、瓊にぎの杵尊が地上の王に降りた。この天降りの教えによつて、天照大皇神の子孫が世界を支配するのが真理であるといふ、神勅を教える教育が徹底して始まりました。

ここに、助ける神が天降つたといふことが、教えられたのですが、現在の天理教会本部では、神懸りといふことと、天降りといふことが全然区別されてないどころか、わざわざ混同させて、わからなく説いている。これは、弾圧を避けるため政府をごまかし、混乱させた論法だったので、それが現在では信者を混乱させてしまつて、何が何だか解らないといふことになつてしまつてゐる。

天降りというのは、天上の神がそのまま降りて来て、地上で権威者として暮らすことをいう。ところが神懸りというのは、天上の神がテレパシーを送り、地上の人間にものを言わせたり行動をさせたりする。これを神懸りといっている。

これですと天津神が偉くて、神懸られた人が卑しくてもこれは成り立つわけです。天降りという場合は、神そのものであるという意味になる。日本の神話で言いますと、瓊瓊杵尊が天降りて、天の岩戸の前で踊ったという天鈿女命あめのつゆめのみことが、神懸りということになっている。

したがって、中山みきは、私が転輪王の心を理解して、私の意思で人助けをするんだ。これは人に動かされているのではなく、天降りて人助けをするのだという表現を使っただけです。ですから、神懸りという言葉は、みき並びにその後継者でありました飯降伊蔵の教えには一度も使われていない。しかし、その当時の政府は、神というのは、天皇家の先祖しか認めませんでしたので、神が身分卑しき百姓屋の女に天降ったということは許しませんでしたので、神懸ったんだという話を作って、警察に届けたという歴史があったのです。

この天降ったということは、確かに自分の意思であるというのですが、実は、この支配する神が天降ったという場合、非常にむごい行動をとることになります。瓊瓊杵尊の曾孫にあたる神武天皇が、橿原の宮に都を作った時の詔勅で私が世界を支配するんだ。「服まごわぬ者はすなわち殺し」と言って、自分に従がわれないものは殺して、橿原を平定した。このような天皇による世界制覇ともいうものが今まで続いているのです。しかし、ここで自分の意思で天降ったのか、これは大変に疑問があると思うのです。というのは、瓊瓊杵尊は生まれたばかりの赤ん坊として天降ってくる。現在でも大嘗祭では、新任の天皇が揺り籠の中に寝まして、そこから出て来て天皇が生まれたという儀式をする。これは天孫降臨のとき、まだ子供であったということであらわしている。確かに天津神が降って来て、地上の瓊瓊杵尊になったのですが、この人はお婆さんの神勅に支配されて自分の意思を持たない、自分の意思を行使できない地上の

権力者であつたのです。民にはむごいのですけれども、自分自身も天照大皇神に、服従する神であつたわけです。

歴代の天皇は、神武天皇の八紘一字という方針に従つて、人民を治める。この体制では天皇も神勅に縛られ、大臣も天皇に縛られ、みきを捕えて拷問した警察官も上役に縛られる下役であつたことになる。この体制には、ようきぐらしが無い、これではいけないというのがみきのとらえ方であつた。

四

みきが、みかぐらうたの中で、諄々と教えているのは、しつかり思案をしるということです。しつかり思案をするということは、みきが説いた教義さえも鵜呑みにするのではない。自分で本當かウソかよく思案して、心に納めたら自分の意思で動いてくれ。動かされる人間じゃなく、自分で生きなさいということを非常に強く教えた。助ける神の心を理解して、自分が生きなさいと言われた。

天理教では、おふでさきの中に出てくる神のとらえ方を、神の体・神の心と二つに分けて解釈している。しかし、みきがいつも説いていた説き方では、体と心は一つのものであつて、別のものではないという姿勢をとつていた。

みきは、心と体はひとつの物であるけれども、世間の人は、形や物質の方に重点をおくと体といい、動き・性質の方に重点をおくと精神とか心と言う。そういう風にわけているので、便宜上二つに分けて神の説明をしている。

体については、「この世」であると説いている。天理教の教義では言葉だけではなく、みかぐら歌には手振りが付いていますので、「この世」という手振りと同じ手振りを他の歌で捜しますと、人の心はまぢまぢだと言うときの手振りと同じになる。ですから、人間の心と心が引き合い、つながつてつくり上げる人間社会を「この世」といつているのです。みきの教えの中には、岩石や水の話、地球上どれだけ陸地で、どれだけ海だという話も出てきません。全部人の心のつながりを主にして話している。だから、この世というのが神の体で、この世界は神の心によつて動かされ、

神の心が世界をリードして行くという。人間も、その通りだということになる。

神の心については、おふでさきには、神↓月日↓親という順序で説いている。最初、「神」と説いていたが、明治七年にみきが捕えられ、日本国では、天皇やそれに忠義を尽くしたことによって、神と認められた者のみが神であるとして、これ以外は神と呼ばせないという態度で弾圧された。その時以来、神という言葉は使わずに、たすけたいという心でお恵みくださるだけで何も望まないという意味で、「月日」と呼び名を変えたわけです。更にまた、月日を月と日にかけて、月は月読尊、日は天照大皇神だという誤まった解説が行われたときに、初めて「親」という表現に変わっていったのです。

これは、政府の教えに対して、「神」という表現を「月日」に変え、長男秀司が教義をゆがめようとする行動に対して、「親」というように、神の表現を変えていったわけです。

おふでさきで、「月日にわにんけんはじめかけたのわ よふきゆさんがみたいゆへから」と言われて、人間を最初に生み出した時、これはひとりひとりの人間に陽気遊山をさせたいからという言い方をした。そして、一人残らずが「よふきゆさん」だから、この世は陽気づくめであるという姿勢で、みかぐら歌でも、おふでさきでも、全部「陽気づくめ」という言葉がつかわれている。これも、現在の天理教団では、「陽気ぐらし」という言葉を使っているが、みきは、「陽気づくめ」と説き教えたのです。

みきの教えでは、不自由するもののない世界にしてやろう。そのためには、互いに助け合いの神の心に沿えと説いた。これですと、世直しは国体変革の思想ですから、天皇家の弾圧を受けるので、明治二十一年秋、天理教が国家公認宗教になった時、みかぐら歌にある「不自由なき世にしてやろう」という教えを、「不自由なきやうにしてやろう」と改竄し、「陽気づくめの世にする」というみきの教えが、「陽気ぐらし」と変えられ、これが現在の天理教の説き方になっていったわけです。

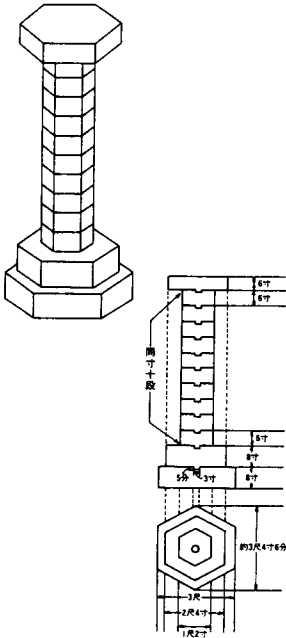
みきの教えた言葉には、「陽気ぐらし」という言葉は一例もないわけです。この「よふきゆさんがみたいゆへから」人間を生み出したという所だけに、「よふきゆさん」があつて、あとは全部、「陽気づくめ」という言葉が使われています。

神はこういう目的を持って、人間を生み出したと説き、神が人間を生み出す時の原理を、現在では、かんろだいでとめとして教えている。

五

初め甘露台は、かほちやのめしべと花粉という形から説明をしたが、後には、花粉ではなく、上部が男性の性器で、下部の一段目・二段目が女性の性器というようにかわつていった。

「かんろだい」寸法表



八島 英雄著
「中山みき研究ノート」より

これは、みきが最初に教えた、お産の際の迷信排除の「をびやゆるし」の教えが影響していることによります。今までのお産の教えだと、子種は男にあつて、女は栄養を与えるだけだといつて、男女差別が非常にきびしかった。

日本の女性は全員ウツの状態にいて、健康になろうにもなれない状態であった。そこでみきは、それは間違いであつて、女松男松の隔てはないと言つて、人間の始まり出しも女五分・男五分の補い合い・助け合いによつて陽気ぐらすする子ができると教えた。これがかんろだいの基本の理となります。

明治三年に、歌と手振りを教えて、甘露台を囲み、八方からそれぞれ助け合い補い合う。これをすいき・ぬくみの人間が助け合う。つなぎ・つっぱりの人間が助け合うんだという。人間世界の調和の姿は、このようだけれども、生きものの発生には、ぬくみとすいきがつり合つてちょうど良い温度が出来、つなぎという皮が出来、中身がつぶれないようにつっぱりが内から支える。こういう所に、すいきあげさげ・のみくい出入りの働き即ち生活現象がでて、成長させる引き伸す働きが、それに釣り合つて働いてくる。もう一つここに、息吹きわけ・呼吸ということがあります、切るという働き（分裂して自分と同じ生き物をまた生み出す能力）がついて、「命あるもの」が出てくると教えている。

基本が、この男性的働きと女性的働きで全て調和がとれ、調和のとれた中から命あるものが生れ出し、その調和がくずれないで続いている中で成長し、次の世代に生き続けていく。途中一度も死ぬことがなく親から子、子から孫というように、長い間生き続けて来たのが現在である。

これをみきは、「元始まりの話」といい、この世の真理であり、理が神であるというように教えた。この真理が神の心だと教えたのです。

この神の働き方を見ると、「互いたすけ合い」と言うは、これは諭す理、人をたすける心は真の誠という。おかきさげ(注) おさづけを許された時に渡される書きもの。用木の心構えが記されている)にある言葉は、ここに生きる人間としては、助け合うんだというのではなく、自分の持つてる物で、相手の足らない所にすべて足し、調和をとつて陽気な世界を作ると言うのが、本当の意識だと。こういうように教え、これが転輪王の心なんだと教えた。

六

この、転輪王の心が、この乱れた世界を正して陽氣に変える理論であると同時に、人類発生の理論でもあるから元始めた神であり、陽氣づくめに最後に救う実の神であると慶応三年のみかぐらうたに歌われている。このような真理を、神の心といい、この神の働きで、陽氣遊山してくれと人間を生み出した。その陽氣遊山する人間たちが助け合つて、調和のとれた陽氣づくめの世界を作るために、この真理は働き続けるということです。

そこで、ある時期のおふでさきの中に、「をなぢ胎内三どやどりた」と書かれて、助け合うように神が働きかけているのに、生み出された神の子が、助け合わない絶滅するという可能性を教えています。結果を支配しない原理が神なんです。互いに助け合えば陽氣づくめになると教えるのですが、助け合わなければ破綻がおこり絶滅すると説いた。よく神の作った世界は、神が絶滅はさせないだろうと甘い考えが宗教者にはみえるのですが、神の心に沿わない時は冷酷に、全部絶滅しそれを繰り返した。三度目発生した人間たちが、ずーっと今まで生き続けて来たんだから、殺し合わないでくれという言い方なんです。

そして、おふでさきの中で、「どううみのなかよりしゆごふをしへかけ　それがたんくさかんなるぞや」と言つて、最初からこんな人間を作ったのではなく、どじょうのように、泥海の中を泳ぎ回っていたような小さな生きものから始めたんだ。それがだんだん盛んになり、「月日よりたんく心つくしきり　そのゆへなるのにんげんである」と過去から現在を説明した。

現在については、現在は互いに助けあう条件は整っているのに、人間が悪しきに流れて、陽氣ぐらしをしていない。この悪をはつきりとこれから教えると言つて、明治十年に書かれたおふでさきには、この悪事のもと高山に暮らしても谷底に暮らしても同じ魂を持ち、神は平等の守護をしているのに、それを何ぞ高い低いあるように思い違ひした

人間が、人を支配し人の物をとり上げてよいと、こういう考えを持つところに謀反の根が太り、争いになっているのだ。だから、その調和のとり方、助け合いを教えたお勤めの理を理解して、それを心におさめて生きる以外に、争いをおさめる道はないのだからそれを早く知らせてほしいと、こういうように説いた。

更にそれに目覚めた人間は、「この先は世界中はどこまでも陽気づくめにみなしてかかる」という結果があるのだと教えて、これが「よろず委細のもとの因縁」という表題をつけ、この後ずうつと教えられてきた。

みきはこれが神の心、神の思いであると説いた。この神の思いを理解して、自分の心にした者が陽気に暮らせ、神の心と人の心がイコールになった時に、神の社となる。そのものが神で、神のお使いでも、神の僕しもべ・神の公民おみみたらでもない。神の心を理解して心におさめ、自分の生きがいが難波をたすけるのだと思つたら、自分の意思で生きるのだ、これが陽気暮しの一番の基本である。これがみきの教えの特徴だと思ひます。

そして、この理を行わずに、なぜみんながこの悪しきに気がつかずに通つてしまうのかということ、悪しきの説明としておふでさきの中でしている。

七

「悪しき」というのは、「ほこり」「ついしよう」「うそ」という三つの表現で説いている。この「ほこり」とは、気づかない悪しきであるという言い方をし、また、おふでさきの中では、「をしい」「ほしい」「かわい」「よく」「こうまん」の五つで説いている。現在の天理教団では、これに、「にくい」「うらみ」「はらだち」の三つを付け加えて、明治の中期頃から八つの「ほこり」として説かれるようになった。この五つをとらえて、こういうことが悪いのですといへば、誰れでもこれが悪いですとあたりまえのように答えるのです。

しかし、何故、気づかない悪しきを「ほこり」とたとえるのかというと、今でもいえるのですが、明治のはじめで

は、日本の一番尊い人・天皇が最高であり、至尊であり、至誠であり、最高の道徳、目標になっていた。そして、偉いお方は働かないでください。私たちが働きますというように、偉い人は身おしみをして当然だという考えがあった。それから、当時の偉い人・尊い人に働いた者は、次の収穫期迄かろうじて生きるだけのものは残こしてもらつても、あとはみんな年貢として納めるのが、当時の公民の立場であつたのです。ですから偉い人は、みなとつてあたりまえ。偉い人に捧げてあたりまえ。これが「ほしい」ということになるわけです。

これをかんろだいつとめで言うのと、それぞれの人が、それぞれの持ち味で助け合う。いろいろな働き方の中で、私の持ち味を惜しんだら破綻がおこる。また人の提供してきた働きをとつたら崩れてしまうわけです。だから「悪しき」そのものなんです。

しかし、それが尊いお方は、みんなのものを集めてあたりまえ。尊いお方に捧げることが良いことだというように教えられていると、これを悪しきとは思わないわけです。

また、「かわい」というのは、自分のかわいいものにあたえる、特に自分の生命の延長線である子供に与えるということが、かわいいのはこりの究極なんです。これが日本の^{かながら}惟神の道では、一番正しい尊いことで、万世一系この権力は続いてきたのだということになる。

「よく」というのは、支配欲のことで、物をとるとか惜むというのではなくて、人の心までも自分の思い通りに動かすことをいい、最もよろしくないことです。

「こうまん」というのは、力のある者が人まで支配しますが、その支配する人の子は、自分は力がなくともあの偉い方の子供だから、子孫であるから尊ぶべきである。気ままを言っていんだらうという意識を持つて来る。これがいけないという。たしかに悪そのものと思える。しかし、日本国の天皇制教育では、これを尊いお方の属性であると、もつぱら教えつづけて来た。ですから、惟神の道で一番尊いお方を見ていると、悪しきが悪しきと見えてこないとい

うことで、「気づかない悪しき」となり、これを「ほこり」というようになったわけです。

差別思想である高山の説教が悪であるということ、知らず知らずのうちに、その高山の説教によって、悪を悪とも思わずに、ついあの身になりたいという思いになってしまう。これが、人の世界の陽気ぐらしを壊していくことになるのだと説かれている。

「ついでしよう」というのは、権力者が言うことを聞けと君臨すると、民は無理が通れば道理がひっこむということで、自分の言いたいことも言わずにこれに追随する。これを「ついでしよう」と言った。また、追従やじつと我慢だけではなく、自分も上の人の言うことに黙って従えば出世させてくれるのではないか、権力者の代理を務められるのではないかと、自分の方から信心にはずれていることを承知で、出世のため、利益のために、真実でない言行をすることを「うそ」と言っています。

そこで、「ほこり」が悪しきの基本であるけれども、「月日にはうそとついでしようこれきらい」とおふでさきの中で断定して、そういうまちがった心がまえを直すという方針をとったのです。

現在説いている「にくい」「うらみ」「はらだち」の三つは、仏法で三毒といいますが、「をしい」「ほしい」「かわい」「よく」「こうまん」は貪る（貪欲）の「ほこり」だと思います。そして、「にくい」「うらみ」「はらだち」は、瞋恚に当たる。

確かに、自分の陽気ぐらしはこれによって消えてしまうのですが、どちらかというところ、これは被害者の心境になります。この被害者の心境を悪とすべきか、加害者が気づかず、これが良いことだと思っている取り違いが本当の悪なのか、それをみきは問うたのです。しかし、現代の教団は、そこをぼかしてしまつて、被害者いじめを説いて、因縁納消をしないというような説き方に堕ちてしまつた。それで、どうしても被害者いじめの教理になつて来て、この「にくい」「うらみ」「はらだち」が、今の教団では幅をきかして、「これであんたは幸せになれないんだ」と被害者

を教育する態度をとつてしまつたんです。みきの場合、加害者に向つてそれがいけないと言に行つたのが、高山布教という形で表われているのです。

八

みきの教理が、どんな経路で、今日に伝わっているのかというと、まず、中山みきが立教を宣言した時には、高山の説教が皇国学として八紘一宇・神勅が充満していた。この高山の説教は、明治に復活・強化される以前、天皇家から任命された将軍が権力をふるい、将軍から委任された大名領主が支配をしていた。その支配されていた世界の家の中では、家長に領主的性格を許して、同じ家族の中に支配する者と従属するもの・戸主と家族という形を作つていた。白いものを黒いと言つてもハイと言えと、こういう差別社会が、幕末になり行き詰まつたのです。

こういう状況の中で、支配されていた農民、その中でも女性が一生懸命勤めていた。たとえまわりの人が賞めたとしても、限界に達するとその抑圧が噴出します。その時真理を知つていけば世直しの動きになり、真理を心得ていなければ、しきたり破りの破壊活動・暴動で終わつてしまう。そして、みきがこの抑圧を是正する謀反の根を発したのが立教の宣言であつたわけです。

みきは、自分の心で正しいと思つたことをやる以外、陽気ぐらしはないのだと説いてきた。そして、助ける心を持つ者が神であると説いたので弾圧を受け、十八回にわたる警察監獄への御苦勞ということになりました。取り調べでは、一貫して天皇を神と説けということだった。みきはそれに対して、天皇も人間である、百姓のわたし達と同じであるという態度をとり、またつとめ人衆が背中に菊の紋をつけて、弟子達に天皇家の先祖の名前を役割としてつけて呼び合つて、これは助け合うべき人間であることを示す、お勤めまでさせたのです。

この弾圧を受けた時に、弾圧を受けても真実を説くのだというのが、後継者の飯降伊蔵や釈放されてすぐに死んだ

仲田儀三郎とか辻忠作などの人たちがあつた。また一方の人たちは、もう弾圧はいやだというので、神道天理教会というものを設立した。神道天理教会は教義として天皇の先祖の神々を祭り、三条の教憲を教えるということになつていつたのです。

三条の教憲というのは、明治の初めに日本政府が惟神の道、つまり天皇の世界制覇を国民に教えるために三条の教則というものを出し、神道では、これを三条の教憲と唱えていた。

その中の第一条「敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事」。この時の神というのは、天皇の先祖のみを指していた。

第二条「天理人道ヲ明ニスヘキ事」。この時の天理は、神勅を指す。天照大皇神の子孫が、世界を支配すべきであるという。これに命を捧げて仕えるのが人の道、人道であるということである。

第三条は、「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシム可キ事」。天皇家を崇め、天皇の命令に絶対服従しろという。

神道天理教会設立の願書には、この三条の教憲を教えますということしか書いていない。中山みきの名前も出なければ、みかぐらうた・おふでさきも一言も出ていない。

このように、みかぐらうたを改竄し、おふでさきを削り、明治教典を神道の教義で作つて、天理教団ができたのです。敗戦後も、長男秀司が祈禱で営業した、その時の教義をあたかも本当の道の教えであるかのごとく、説き続けて来ている。

そういう状況にあつて、真実を知るわずかの者が、もう教祖百年祭という時期がきたのだから、真実に戻るべきであり、実際の歴史との違い、みきの正しい伝記を本部から発表すべきであるというように提案した。これからは、もうみきの正しい教えを説くと求める動きが出てきた。

それで一番の名義人になつて、本部に申し入れをしていた私が、真向から「そんなことは今さらできん」という本部とぶつかつてしまったわけです。今さらできんという理由は、今発表したら暴動が起こると言います。今さら真実

を発表したら、今の上層部を許しておく筈がない。だから、もう改めないんだ。これから皆が真実に目覚めたら、この教団の維持は成り立たないから、末端の教会長や多くの信者が気がつかないうちに、教会の土地から建物まで本部というより中山家の中山財団に、吸収合併してしまおうと急速に進められてきた。それに対して反省を促した教会長が、次々と除籍されるという事態が現在おこっているわけです。

現在の天理教団の教義と教会の現状ということで、一応まとめさせて頂きます。

※本稿は、昭和六十二年五月二十九日現宗研主催で行った現代宗教研究セミナーにて講演されたものを筆録したものです。